

ほし 彩星 だより 第119号



若年性認知症家族会・彩星の会会報 令和4年9月号

〒160-0022 新宿区新宿1-9-4 中公ビル御苑グリーンハイツ605
TEL 03-5919-4185/FAX 03-6380-5100 E-mail:hoshinokai@beach.ocn.ne.jp

巻頭言



「彩星の会のみなさまとともに」

東京ボランティア・市民活動センター 所長 山崎美貴子

春子さんは60歳代です。父親は10年前に他界し、母親も数年前に死去され、一人っ子であったため一人暮らしでした。20年前に離婚をしています。健康に恵まれ、山登りが好きで、よく時間があると仲間を誘いあちこちの山を制覇していました。11年前に東北で発生した大災害支援にも訪れていました。60歳で定年退職しました。

6年前いつものように山に出かけていたところ、山登りの友人は春子さんの姿がみあたらないことに気づきました。本人は夕方には発見されヘリコプターで都内の病院に救急搬送されました。重体で首、肩、大腿骨、手足など骨折し内臓も損傷、会話を交わすことも困難で危篤状態が続きました。

ほぼ6か月の入院生活の後にリハビリ病院に転院となりました。9か月のリハビリ病院での治療を経て老人ホームに入所されています。現在、食事は経管栄養により摂取しています。手足を用いて体を動かすことは困難でしたが、今は右側の肘を数センチ程度動かすことができるそうです。手の指を動かすことも顔を上下左右に動かすこともむずかしいのですが、1年位前から声を出すことができ始めています。会話をすることまでは困難ですが、彼女は若いころから本を読むことが何よりも大好きでした。そこで近所に設置されているボランティアセンターの職員のコーディネートにより本の読み聞かせ活動を行っているボランティアの訪問が定期的に始まり、喜びがひろがりました。車椅子での移

動は難しく、ストレッチャーによる移動でないと血圧が低下して意識を失ってしまうそうです。

登山による事故により、今まで自分の力で当たり前前にできたことが大きな制限を受けることになりました。食べること、歩くこと、移動すること、入浴することなどの行動制限が生じます。しかし周りのケアワーカーの支援を得てできないと思っていたことができるようになるという実感は、とても大きな希望につながるという場合もあるのではないかと思います。

「できたことができなくなる」という体験に直面することは本当につらいことと思います。私事で申し訳ありませんが、わたくしの夫は突然「要介護5、障害1級」という最重度の判定を受けました。悲しみの底にあると思った時もありましたが、次第にその中で逃げないでその事実を受け止め、夫婦で知恵を出し合い、知恵を見つけながら歩む工夫を重ねました。毎朝2人でよく歌を歌いました。映画や孫たちの試合にも行きました。忘れることができない春子さんは、今苦しみながら障害とたたかっています。若年性認知症に直面されたみなさま、そして身近なご家族で同じような体験を分かち合った方も、大きな変化に急速に遭遇した経験をお持ちのお仲間もおいでになると思います。一人ひとり、一つひとつ多様な経験に直面されておられると思います。病は異なっていますが、他人ごとではない、わがこととして分かち合い、学び合うことを教えていただく機会をいただけたらと願っております。

定例会報告

去る7月24日(日)午後1時から新宿区立障害者福祉センターで定例会が開催された。毎年7月は会場からの質問に専門家がその場で答える企画を実施しており、毎回熱気を帯びた定例会になっている。今年は新型コロナ第7波の中ではあったが会場にはご本人3名を含む25名(うち3名は見学)の参加があった。回答する先生方は、

- ▶ 比留間ちづ子先生(若年認知症社会参加支援センター「ジョイント」所長、作業療法士、作業療法士連盟副理事長、若年認知症サポートセンター副理事長)



- ▶ 勝野とわ子先生(岩手保健医療大学教授、首都大学東京名誉教授、若年認知症サポートセンター理事)



- ▶ 小野寺敦志先生(国際医療福祉大学心理学科 准教授、(一社)全国若年認知症家族会・支援者連絡協議会理事、若年認知症サポートセンター理事)



- ▶ 厚東知成先生(研精会 稲城台病院 医師、若年認知症サポートセンター理事)



上記の4名の先生がZoomで参加され、ご家族などは会場に参加するというハイブリッド型で実施された。

これまでハイブリッド形式での定例会は何度か開催しているが毎回音響など何らかのトラブルが発生していた。しかし今回は世話人1名が自宅のパソコンから統括し、会場でもITに詳しい賛助会員の応援もあり技術的には完璧な状態で開くことができた。

司会は世話人の三橋良博氏によるスムーズな進行で、事前に4名の家族から出ていた質問を画面に表示するとともに読み上げられた。

質問内容は、薬に関すること、現状と施設受け入れの不安、吐き気の解消方法、痛みに関して知っておくべきことと緩和治療についてであった。

質問した家族のうち2名が直前のトラブルで参加できず、会場参加は1名のみであったが先生方からは懇切丁寧な回答が提示された。

質疑応答の様子はYoutubeで視聴できる。



<https://youtu.be/BrT5EJfxIUU>

修了後の第2部は参加者同士の情報交換会だったが時間が足りず自己紹介だけに終わってしまったことが残念だった。

しかしその後13名がサイゼリアでの2次会に移動し、さらには6名が三次会で中華料理屋に行くなど彩星の会ならではの交流ができたと思っている。

彩星の会では電話での相談を受けているが、傾聴からもう一步進んだアドバイスができるようにならないか定例会が終わってあらためて感じた。8月からは毎月1回勉強会を開始することにしたがこれを継続していくことが大切なことと思った次第である。

(文責 羽鳥彰紘)



プロフィール

本人：男性（67歳）

介護者：妻

病名：前頭側頭型認知症

診断時期：2020年

横浜とは、思えないほど野鳥が飛び交い、タヌキの親子と出会う県立公園まで、1分、100メートルの距離。その隣に障がい者施設と老健があり、散歩されている方をちょこちょこ見かけ、子育てにはすばらしいところと家を構えたのは、結婚して10年目のことです。それから、10年経ったころ遠方にいた義父母が揃って認知症になり、一緒に暮らし始めました。1分で行ける老健にお世話になり、近くなので、毎日、食事や散歩をしながら過ごし、その後、病院を転々として2人たて続けに空へ見送りました。

そして、ある日カメラやパソコンなど電子機器の設計をしているバリバリの理系の夫が、留守電の仕方がわからないと説明書を読んでいる。電話機の赤いボタンを押すだけなのに・・・「えっ？」と思ったのを鮮明に覚えています。

それから、間もなく会社からの連絡で脳の検査を受けるようにと。結果は『前頭側頭葉型認知症』ダブル介護をし、子どもたちが独立し定年を迎え、やっと、これから楽しもうと思っていたのに、なぜ？どうして？一万人に数人と言われる難病に？乗り越えない壁は与えられないと言うけれど、ちと高すぎやしないかい？泣きわめき、本をあさりネットで調べたけれど、本人は変わらない病気なのだから、家族が我慢しろと書いてあるのばかり。でも、毎日、毎日、毎日・・・無理なんです。キーツとなって噴火して他人と比べてします。

同年代の友人は楽しく暮らしている。悩みといたら、LINEで『今晚のおかずは何にするー？』と送ってくる。のん気でいいなあ。義父のように80才なら諦めもつきます。なのに、まだ60才そこそこなのに。言葉を失っていくって、こんなこと？宇宙語を話す宇宙人と暮らしています。

先日、またやってしまいました。どうしても、自分を抑えられない。

その夜、『くら寿司』のパーキングに向かいました。雨でうしろがよく見えない。「窓開けて見て」と頼んだけど通じない。5回、10回いろいろ言い方を変えて、ジェスチャーでも通じない。自分の運転が下手になってきた焦り。手伝ってくれない怒り。一気に食欲は失せ「もう帰る!!」と罵声をあびせながら、ご飯も作らず布団へと。でも夫はやさしい。「大丈夫だよ」、「ガンバルよ」、「ゴメンヨ」、「ごめんよ」と謝っているのに、自分に腹が立ち、私のあたまのほうがよくほど壊れているんじゃないかと。次の日、病院へ行ったら、ストレスだから落ち着いてと漢方薬を処方していただきました。

現役時代、私には到底理解できない計算をしていた彼が、ひと桁のたし算の宿題をしているのを見ると、この先どうなるのだろうか？答えがわからず、自分で設計した計算機を使っていてずるいなと笑える。「それ、あなたが作ったんだよ」と言うと「そうか？」と。そうだよ、私が変わっていくしかないんだ。穏やかなままの夫と鬼に変わる私・・・

鬼に変わらずに新婚の時のように、靴下をはかせ、一緒にお風呂に入り背中を流そう。

- ① 診断に驚く 戸惑い 否定
- ② 混乱 怒り 拒絶
- ③ 割り切り 諦め
- ④ 受容 (家族の心理 引用)

長いトンネルの今はどのあたり？入ったばかり？それとも一番の暗闇？あとどの位で出口があるのか？まだ発症する前のことだけど、新聞の介護特集をぼんやり読んだことがあります。そこに『今日はちゃんとウンチができるか？できるとこれ以上ない喜び』とありました。

幸せって、考え次第ってことなのですね。健やかなるときも病めるときも、と誓って40年。ルビー婚の記念にふと思いつき普段着で写真館へ行きました。介護についての助言を見つけてきました。

- ① かんばらない
- ② 抱え込まない
- ③ 弱音を吐く
- ④ くらべない
- ⑤ 終わりを考える (引用)

⑤はつらい。まだ考えたくない。そして、ため息のつき方として、フーッと、すると、口を

すぼめしかめっ面になるから、ハーッと、口を開けて3回する。するとおのずと深呼吸となり、新しい酸素が入って笑顔になれる。よーし、まだ、先の先だろうけれど、金婚式をめざそう。

毎日を楽しもう。なんとかなるさ！！



人今人

「認知症家族の会」の原点（3回連載 第1回）

鈴木廣子（元家族会員）

プロフィール

【夫】

- 1983年 40歳から20年間 IT 関係の会社を経営
- 2000年 夫の母が逝去（夫57歳）。その後徐々に周辺症状「怒鳴り散らす」などその頃から会社経営が悪化（家族はそれに気が付かなかった）
- 2003年 会社が倒産、自己破産（60歳）
- 2006年 認知症と診断（63歳）
- 2008年 ピック病と診断（65歳）（娘3人は独立していた）
- 2013年 幾つかの精神病院を転院後和光病院に入院
- 2017年 召天（74歳）

【妻】

- 2008年 診断後娘が紹介してくれた教会へ通う。
- 2015年 認知症家族の会「大空」立ち上げ
- 2022年 一旦「大空」を離れていたがこの年再開

今年の三月、お茶の水聖書学院を卒業し、これから学んだことをどのように生かすことができるかと思っていた時、以前、立ち上げさせていただいた「認知症家族の会大空」とそれから生まれた「大空カフェ」の働きで再度、中心的に関わることができるようにと導かれました。

同時に、終活を考え、家の整理をしていた時に、昔、書いた文章が見つかりました。読みながら昔の苦しみがよみがえって来て、暗い気持ちになりましたが、私の教会の牧師に見ていただいたところ、「より多くの人に見ていただくようにしたら良いのでは・・・」と勧められました。それは似たような問題に苦しんでいる認知症の家族の方にお役に立てる可能性があるからです。それを教会の和田直子さんがきれいに文章を打ち直してくださいました。

私の夫は結婚したとき、岩崎通信機の研究所の연구원として働いておりました。そこでの働

きからアドシステム株式会社という IT 関係の会社を独立させることになりました。約 30 人の従業員を雇い、約 20 年間、会社は順調に経営されていました。しかし 65 歳のときに、日本では当時あまり知られていない認知症と診断されました。ドイツのピック博士が発見した「前頭、側頭葉型認知症」で、通称、ピック病と呼ばれます。

主人がそのような病であることは最初まったく気づきませんでした。主人の母を自宅で介護して、見送ることができた後、徐々に様子がおかしくなってきました。幸い、三人の娘たちはそれぞれ、教育や福祉の仕事に就くところまで育っていましたが、家の中で少しでも気に入らないことがあると、私にも娘にも「出て行け！」と怒鳴り散らすようになっていました。あの優しい主人に何が起きたのか。皆目、見当がつきませんでした。

そして、それと並行して、会社の経営もみるみる悪化して行きました。さらに、会社の倒産危機の中で、自死をほのめかすようにさえなってきました。

今になっても、「病気のことがもっと早くわかっていたら、会社の倒産も避けることができたばかりか、家族が互いにもっと優しく助け合うことができていたはずなのに・・・」と悔やまれます。ただ、当時は、主人も私たちも病気のことを分からず、会社の倒産危機の前に、家庭も崩壊状態にあったという現実がありました。

以下は、その病いが人知れず発症し、進行して行く中で、自分や家族の葛藤を書いたものです。

「人間って素晴らしい」～ピック病の夫と共に生きる～

1. 富士山がきれい

梅雨に入ったある日「やっとお天気になったから、今日は富士山がきれいにみえるよ！お父さん」と私が言うと「それがどうした」と冷たく答える夫…

昔、私が三女を妊娠している時、いつも布団を干してくれていた夫が2階のベランダから「おーい、おーい」と私を呼び、身重な私が2階にやっと上がっていくと「今日はあんまり富士山がきれいだから、お前に見せたくて呼んだんだよ」と父さんは言ったよね…。「二人で晴れた空に浮かぶ富士山を見たじゃない」私は昔を思い出して涙が出る。

そしてしばらくたった雨の日。

「今日はまた雨降りでいやだなあ！私自転車で仕事に行くから、雨の日はたいへんだわ！」

また、夫は答える。「だから何なんだ！」

「そんな冷たい言い方しなくてもいいじゃない！父さんは私に働かせて、自分は毎日毎日テレビ見て、ゴロゴロして一日過ごしていてよくそんな冷たい言い方できるね。」私はシャワーのように、日ごろの不満と愚痴を言うてしまおう。反論できない夫に向かって…。その後は悲しくて自己嫌悪になる日々だった。

こんなケンカはどここの家でもあるのだが、夫は人一倍子煩悩でやさしい人だったのに…。別人のように変わってしまった。今から約20年も前のことです。

三女が小学校の頃、私の友人が「誰かと思っただわよ。大きな子供を背負って、傘さして走っ

ている人がいて。」といったことがある。そのあと夫に何故？と聞くと、「スーパーの駐車場から雨の中、子供を歩かせたら、時間が掛かって濡れちゃうからさ…。」といった。

ほんとうに優しい人だった。父さんの性格が少しずつ変化していったことを、家族は気づいていたが、それが病気によるものとは思いませんでした。

そんなある日、大事件が起こる。

2. 夫の会社の倒産

何の前触れもなく、自分の会社が倒産するかもしれない、と言い出したのだ。しかも自分の会社が倒産してもこの先どうしたら良いかを考えていない夫に、家族は驚愕する。認知症と診断される約2年半前のことだ。

あまりに突然のことで子供たちも信じられず、「父さん(とうさん)が倒産(とうさん)」なんてのんきな冗談を言っていたくらいだ。責任能力を失っていた夫は、家出をしてしまう。父さんの後始末は、私と子供達でしなくてはいけなくなる。

私はまず知り合いの弁護士に相談に行く。色々調べた結果、負債額が余りにも大きすぎて自己破産の手続きが必要になる。自己破産を弁護士に依頼するためには「弁護士代は前金です。」と言われ、子供の結婚のために蓄えていたお金や私のへそくりをすべて当てた。

几帳面な性格の夫は、家の経済もすべて握っていたので、私は彼が借金まみれになっていることも分からなかった。「残念ですが、自宅も手放すことになるでしょう。」と言われ、大忙しで住む場所を探す。

一方、家出をした夫は自分だけ賃貸の団地を借り、さっさと引越しを始める。私と子供は、小さなアパートを借り、家の中の荷物を整理しなくてはならず、毎日夢中で片付けた。古道具屋さんに売れるもの、バザーに出すもの、大きな家具はほとんど、持ち出すことが出来ず、有料で引き取ってもらおう。夫の貯金はすべて封鎖され、無一文になっての引っ越しが始まった。

ひと段落ついたころ、私は悲しくて、夕方暗くなるまで、公園のベンチに座ったまま、帰りたくない日々が続いた。ホームレス状態だった。夜も眠れなくなり、一家心中も他人事ではないみじめな状態だった。

独身時代は親が守ってくれて、結婚してからずっと夫が守ってくれたのに、頼りになる夫はもういないも同然なのだから孤独だった。

3.家族の絆

私が余りに落ち込んでいたので、娘がアパートの近くのキリスト教会をネットで探してくれた。それで、私は教会の門をたたく。「先生、私は家も財産もすべて失い、ピック病という認知症の夫は、追い込まれると暴言暴力を振り、何の相談相手にもなってくれません。この先どうやって生きてゆけば良いのでしょうか？」先生は言われた「困難に出会って苦労している母親がどうやって苦境を乗り越え、立ち直っていくかを子供さんに見せることです。そんな母親の生き方が、財産になるのです。」「八方ふさがりでも上は空いています。空を見上げて暮らしましょう。神さまは守ってくださいますよ!!」教会の帰り道、青空が美しくまぶしかった。私の心に光がさしたような気がした。

そして私を元気づけた言葉は……。 「資産家に子供はいない。いるのは相続人だけ。」「本当の親子の絆は、これから作られる。」と私は思った。

良い家庭や家族は入れ物では無く中身なのだと気付いた。それから私は愚痴を言うのをやめ、子供たちを呼んで手料理で明るく過ごせるように努力した。

父さんも子供たちと食事をするときには笑顔が出て嬉しそうになった。パートの仕事をフルタイムに変え、私が生活の糧を稼ぐ日々が続いている。

父さんの病気のおかげで本当の人間の幸を感じることが出来た。やっと二人きりの老後が来たのだから……。

4.認知症の家族の試練

どうしても家族が乗り越えなくてはならない四つのことがある。

① 精神科にかかること

決定的な事故や事件に関わらない限り家族が本人を精神科に見せることは難しい。特に初期ではMRIでも、脳の変化は見られない。我が家では父さんの出来事が余りにも異常だったので分かったが、普通のサラリーマンでは分かりづらかったと思う。

幸いにも、家族が認知症ではないかと疑いはじめた頃、夫は五年前に胃がんの手術をしていてフォローアップの検査が毎年あったので、慶応病院の内科の先生に事情を手紙に書いて、胃の検査と脳の検査を一緒にお願ひできた。先生

からはとても上手に本人に説明があり、精神内科を受診することが出来た。(胃がんは初期で治っていたが、慶応病院は1年に1度の検査があり幸いであった、しかしまだその時脳に変化はなかった。)それから家族が日常の出来事を日記にして先生にお持ちして、そこで間違いなく認知症と言われ、その数年後に、ピック病と分かるのであった。

② 車の運転をやめさせること

咄嗟の判断が出来ないピック病は車の事故が一番怖い。病気がわかった後も、夫は車を乗り廻し、家族を心配させた。大きな事故ではないがバイクと衝突事故を起こしたり、車をガレージの中でぶつけたり、几帳面な性格だった夫には考えられない出来事が次々に起こった。

その後、一番大きな出来事が起こってしまった。 “当て逃げ事件”である。

九月のお彼岸に信州まで高速を使って、墓参りに行った時、夫の運転が心配なので娘婿に運転を依頼してあった。飯田インターを降りた時、夫は、「どうしても道がわかる自分が運転する・・・」と言い出してハンドルを握ってしまう。案の定、お寺の近くの田舎道で軽自動車と接触事故を起こしてしまう。私たち同乗者は当然車が止まると思っていたのに、夫はそのまま運転し、お寺まで走り去ってしまう。

「止まって、止まってお父さん!!」皆で声を震わせて叫ぶが止まらない。私は急いで110番に電話をかけ、娘と婿は現場に戻る。ぶつかった軽自動車は現場にはいなくなっていた。

私たちは、ガタガタ震えながら、警察に事故報告をし、申し訳ないと謝り続ける。警察の連絡待ちということでとりあえず寺に戻ると、夫はひとりで何事もなかったように墓参りをしている。

この異常さを皆で驚き、おびえて帰ってくる。婿がその夜、車を廃車にするため、車を隠しに行った。ところが夫は数日後「レンタカー」を借りると、パンフレットを持ち帰ってきた。私は夫の病気を証明するため、診断書を持って家周辺のレンタカー屋さんを回り、絶対貸さないようお願いに行く。他人の車を借りたらもっと大変なことになると、長女が警察に免許返納手続きに奔走する。これに本人はなかなか納得できず、娘を恨み続けた。

③ 金銭トラブル

ピック病と言えば“万引きをする”と言われているが、お金にまつわる苦勞が絶えない。本人は借金を山ほどしても気にしない。返す気がないから家族が苦勞する。欲望を抑えられない病気である。

サラ金、高利貸しなど、悪いことにも利用されやすい。我が家でも、サラ金にお金を借りようとしているのを最近見つけ、攻撃ミサイルのごとく、即お断りできたので、ほっとしたが、家族は怖くなり、その後娘たちは夫にお小遣いをくれるようになった。

「お父さん、お金借りないでね。」と娘たちは口癖のように言う。

④ 迷惑な日常生活

この頃、人から頂いた菓子折りや宅急便の中身を見たくて、すぐあけてしまう。送り状や箱を読んでも意味が解らなくなっている。洗濯をしてくれるのはありがたいのだが、液体洗剤のボトルが三日で空になる。いくらキャップ一杯が一回分と教えても、キャップ一杯の意味が解らない。

他人の意見を聞かない。クーラーのリモコンを隠してしまい、分からなくなるなど・・・昔、電化製品はすべて夫が購入していて、機械に強い人だったのに、自分が出来ないことはすべて「壊れた。」と言う。冷蔵庫の扉が開いていて氷が解けると「壊れた。」という。電波時計が合わせられず「壊れたから捨てろ！」と言う。ファックスのインクが切れても「壊れたから買って来る。」と言う。

ここまでは言い聞かせて説得して、我慢をするが、先日、アクエリアスとお水を間違えて、湯沸かしポットに入れたため、私はお茶が甘く感じられ、自分だけ味覚障害かと思って、医者に行ってしまう。本人はケロツとして謝ることもない。

私のお気に入りのモーニングカップを壊しても、欠片を中に入れたまま食器戸棚にしまい込んだり、ワインを空けて、天井をしみだらけにしたり、危険がいっぱいで、社会生活はできなくなっている。

家族は悲しくても辛くても耐えて、守っていかなくてはならない。この先どのようなことが起こるのか不安がいっぱいでも、家族しか守ってあげられないのだから。

ピック病は他人に嫌われる病気と言うけれど、本人も辛い。重い缶のお茶やお水を買って

きて指を脱臼したり、自転車の転倒も日常茶飯事。限度や程度がわからない。

自分の衰えを時々自覚して落ち込む姿を見るのも辛い。先日長女が結婚し、簡単な両家の食事会があった。帰り道ポツリといった。

「父さんは皆の話をしていることがわからないから、退屈してしまったよ！！」私は涙があふれた。父さんはだんだん小さい子どもに近づいていく……。

でも私は父さんを大人だと思っているから腹が立つ。怒りが爆発する。そして自己嫌悪に陥る。魚は骨があるから食べないし、熱いみそ汁は飲めない。サラダも煮物も小さく、柔らかくしてあげる。大好物だったピワやさくらんぼも食べ方がわからないから、リンゴは皮を剥いて小さく切ると喜んで食べる。

そう言えば、父さんが子供に果物もお魚も小さくして食べさせてあげたよね……。父さん、ごめんなさい。いつも怒ってばかりいて……涙。

悲しくて、信州で老人ホームを経営している伯父さんに電話をかけると、「夫がボケたら、妻もボケておかにゃーいかに」と言われた。もはや大人の会話が通じなくなったのだ。

5.父さんがくれた贈り物

① 人間って素晴らしい

ピック病と言う病気は認知症の中でも、よく解明されていない不思議な病気で、普通のボケとは違う。前頭葉と側頭葉の委縮は人間らしさを失っていく。

ある幼児教育の専門家が、「優秀な子供に育てたいなら、前頭葉を発達させなさい。前頭葉は人とのかわり、感受性、責任感を強く感じる所で、社会性、人間形成に関係している所だから、大切なのです。」と言っていた。私の考えを裏付けるような話だった。また、人間だけが、言葉でコミュニケーションをし、相手の心や気持ちを察するのである。動物の言葉は情報伝達にすぎないから。

私は人間が、神さまが人間だけに特別に作ってくれた素晴らしい脳を持っていることに驚かされた。神さまは、当たり前のように生きている私たちに、動物と人間の違いを教え、感謝して生きること、人間の尊厳を教えてくれたように思う。

お父さんは犠牲者ではなくて、大切なことを私たちに教えてくれた先生なのだと感謝して生きることを…。嬉しかった。

②私の仕事に活かされている

私は今デイサービスでヘルパーの仕事をしている。ご利用様は身体障害者や認知症のお年寄りが多い。福祉の現場はいろいろ大変なことも多く、辛い時もあるけれど、ご利用様の家族は私たちスタッフの何倍も苦勞をし、辛い思いで暮らしていることがよくわかるから、私は良き理解者になれる。介護の辛さを人一倍経験しているので、職場でめげることはない。

③ライフワークが決まった

今、地域にある認知症の家族会に入っている。皆さんの苦勞話を聞き、励まし合っているが、これからも活動の中で助け合える仕事をしていきたい。自分の経験を生かして、苦しみの淵にある人たちを助けてあげたい。

6.最後に…（傷ついた夫の生活）

昔飼っていた猫のラン君を、娘が世話している。この猫は交通事故で失明し、大手術をしているが、夫が大切に育てた猫である。娘は、

「ラン君が会いたがっているよ。」とっては父さんを食事に招いてくれる。

今の楽しみは甘いものを食べること、パソコンを打つこと（若年認知症サポートセンターと彩星（ほし）の会でボランティアをしている）。野球のテレビを見ること、暴言や暴力は無く、落ち着いている。

月に一回、近くの精神内科に自転車で通う。いつまでこの生活が続けられるかわからないが、幸せな気持ちでいてほしい。子供達や私にとって、大切な家族だから。そして、お父さんのおかげで、私たちは親子愛を得たことも心から感謝している。

失われた器の中身は努力すれば、違った形で満たされることがあると婿が言ってくれたけれど、三女に八月に初孫が生まれる。

次女は時々「疲れているでしょう、母さん。」と日帰り温泉に連れて行ってってくれる。長女は、月の初めにサポートセンターへ行く父親の交通費を内緒で渡し、父に交通費を支給してくれている。「交通費が出るから、行かないと…。」と夫が週に一回家を空ける日は私の楽しみでもある。こんな優しい娘たちになったのも、お父さんのお蔭です。

（次号に続く）

介護 **ワン** ポイント 体験談

Q.在宅で、突然「今から家に帰らんといかん！」に対して。

A.「帰る前に、仏壇にお参りして」と頼み、仏壇の母、祖母がどんな人だったかを話してもらったらうまくいった。

NO,45

Q「あるものが、人の顔などに見えるケース」

A その、あるものを取り除く と成功例が多い

NO,46

ご本人の作品展#4

岡田一實様（第2回）

提供 岡田一實様（2022年3月逝去）

プロフィール

1947年生まれ

サラリーマン生活の傍ら趣味で絵を描く

1998年作品を水彩画連盟展に出品（東京都美術館）

2000年退職

2001年自宅近くの集会所で絵画教室を開催

6月 念願のギャラリーで個展を開催

2002年8月アルツハイマー型認知症と診断（55歳）

2016年認知症専門病院に入院、現在に到る

2022年3月30日 逝去



「二人」



「花」



「静物」

（作品写真斜角補正：旗野雅春）

犬による認知症セラピーの思い出

羽鳥 彰紘



妻は2007年認知症と診断されたので今年で15年目になる。

ここ6年間は特養での生活だがコロナで面会が思うようにならず、1か月前には所内でまた陽性者が出たとのことでここ数か月間毎週1回のガラス越しの面会も完全にシャットアウトされている。

毎週1回受付に食後用のプリンを持っていくが、その時に妻の様子を聞くのが関の山だ。でも答えは決まって「元気になっています」。歯がゆいがスタッフはもっと大変だろうと思えばそれ以上は聞けない。

仕方なく絵ハガキに簡単なことを書いて毎日投函している。以前は花の絵がプリントされている絵葉書を買ってきたが最近は昔撮り貯めた写真を官製はがきに印刷している。しかしスタッフが読んでくれているのかどうかは分からない。そもそも乱筆なので読めないのかもしれないし、半分は自分の気休めだからさほどイライラすることも無い。コロナで会えなくなってからだから相当な枚数が溜まっている筈だが処分されていることはないだろう。

こういう時は昔の思い出に浸るしかない。

妻が診断されて2年目に子犬を飼いだした。キャバリアという耳の長い犬だ。妻は元々犬が嫌いで私が昔から何度も提案したが聞き入れて貰えなかった。

ただ今回ばかりは自信があった。「絶対にセラピーになる!」。自分で勝手に決めてしまった。

名前は次女が「くうたん」と名付けてくれた。

それでも案の定というか最初は「また床の上にうんちして!汚い」とか「臭い!」と言って襖をピシャッと閉めてしまう日々が続いた。2か月ほど経った頃長女が里帰りして「ねえお母さん、可愛いよ、抱いてごらん」と無理やり抱かせた。ぎごちない抱き方だった。やはり苦手なのか?

しかしこれが転機だった。

ある日のことふと気が付くと妻が庭のベランダに腰かけて日向ぼっこしながら犬を抱いているではないか。しかも抱きながら「ソ〜おさん

ソ〜おさん・・・」と歌っている。次のフレーズには続かなかったが「お耳が長いのね」と歌いたかったのだ。これまで童謡など一度も聞いたことがなかった。まさに感動の瞬間だった。

その頃近所の子供たちが子犬を見ようと我が家の庭に入ってくるようになった。それまでは子供の相手が苦手な無視していた妻だったが次第に自ら子供たちに話しかけるようになっていった。犬を見せながら「くうちゃんて言うの」。子供たちは「くうちゃん?」。それに「くうちゃん」と答える。その程度のやり取りだったがそれだけでも以前では考えられない行動だった。

それからは次第に犬の散歩と一緒に歩くようになり、家ではエサも作るようになった。一日何度も作ってしまうこともあったがそれも私にとっては嬉しい間違いだった。

認知症の進行が遅くなっていると実感した。妻が犬と仲良くしているところを見るのは私にとってのセラピーでもあった。

散歩に出るときには左手にリード、右手に妻の手を握って近くの神田川の土手を歩いた。すれ違う人からは茶化されることもあったが、手を離すと一人どんどん行ってしまふのだ。代物の処理に手間取ってちょっと妻の手を離すとほるか遠くまで行ってしまっていることも再々だった。まったく油断のならない日々であったが、今となってはあの7年間はなつかしい思い出になっている。

今では14歳になった犬を一日3回散歩に連れ出すのが私の日課になっているがペットロスを真剣に心配している今日この頃である。



・・・9月定例会のお知らせ・・・

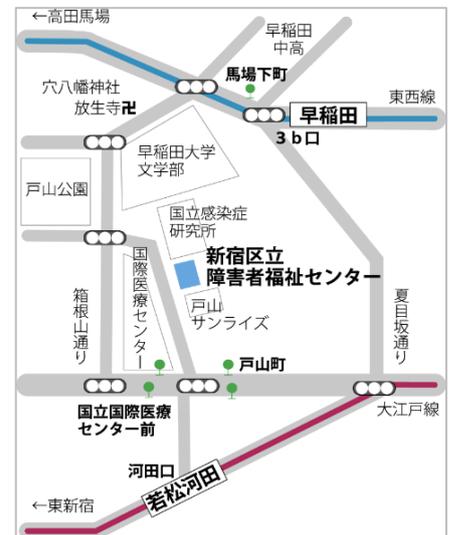
日時 9月25日（日）13:00～15:30（受付開始 12:30）

場所 新宿区立障害者福祉センター（2階会議室）

（新宿区戸山1-22-2）

当日は家族同士の情報交換会です

コロナ禍でなかなか外出できないご家族の皆様
久しぶりに集まって日頃の悩みや苦労などを話し合
いませんか。途中参加、途中退場もOK
当日は感染対策を十分に取って開催します。
どうぞご参加ください。



・・・11月定例会のお知らせ・・・

日時 11月27日（日）13:00～15:30（受付開始 12:30）

場所 新宿区立障害者福祉センター（2階会議室）

（新宿区戸山1-22-2）

（第1部）13:00～14:00 講演：三橋 良博 氏（彩星の会世話人）

（第2部）14:15～15:30 家族同士の情報交換会

これまで奥様の介護をしながらブログや Facebook で発信をし続けている三橋 良博さん。

認知症の人と家族の会神奈川県支部世話人としても長い経験があります。

今回は人生の最終段階にかかった奥様の介護についての思いを話して下さい。

第2部はいつものように家族同士の情報交換会です。

奮ってご参加ください。



会員ご家族の方へ事務所を開放しています

コーヒーを飲みながら皆で語り合しましょう
(毎月第一土曜日 13:00~15:00)

10月1日(土)

11月5日(土)

12月3日(土)

(名前を募集しています。9月30日締め切ります。彩星の会まで郵送・メール・FAXで)。



Webサロン

開催のお知らせ

Zoomを使って

Webサロンを開催しています。

毎週火曜日 20:00~20:40

毎月第一土曜日 20:00~20:40



パソコン・スマホから招待メールをクリックするだけで参加できます。
毎回沢山の方が参加され情報交換しています。操作方法についてもお尋ねください。

・・・寄付のご報告・・・

【2022年6月~7月】

吉川 誠様、鈴木富美子様、藤沼三郎様、旗野雅春様

2022年度寄付金累計 542,756円(7月31日現在)

厚く御礼申し上げます! 彩星の会事務局

- ご相談・ご入会は彩星の会事務局までご連絡ください

【相談日】月・水・金 11:00~15:00

電話: 03-5919-4185 FAX: 03-6380-5100

E-mail: hoshinokai@beach.ocn.ne.jp HP: <http://www.hoshinokai.org>

- 年会費 (家族会員)5,000円 (賛助会員)A5,000円/B3,000円/C10,000円

- お申込み(ご入金)は下記振替口座宛てにメッセージを添えてお願いします。

郵便振替口座番号: 00170-7-463332

加入者名: 若年性認知症家族会・彩星の会



編集後記



「我が家の一日は犬の散歩から始まる。早朝は鳥の声がよく聞こえ、道沿いの木々や庭先の花は季節の移ろいを知らせてくれるので清々しい気持ちにさせてくれる。鼻歌を歌ったり、犬と目を合わせてお喋りもする。以前は義務感だった散歩が、コロナ禍以降は楽しみに変わり、掛け替えのない時間になった。今朝も無事に散歩を終えた。「お疲れさん」(F)